

1. 推進地域の現状と課題及び調査研究の目的

これまで、京都教育大学附属桃山小学校（以下「本校」という。）では、伝統音楽や郷土の音楽を大切にきた教育活動を行ってきた。京都教育大学（以下「本学」という。）では、これをさらに充実、発展させるため、平成 27 年度からは、文部科学省「我が国の伝統や文化に関する教育の充実に係る調査研究」事業を委託され、本学大学組織や本学附属桃山中学校とともに、伝統音楽の伝承者（保存会）や専門家と連携を図りながら、伝統音楽を教材とした授業開発を行い、音楽科の教育課程の中に位置付けて、伝統や文化に関する教育の充実に図ってきた。また、本校の開発した授業を広めるために、京都府公立小学校 1 校及び京都市公立小学校 1 校との連携を図り、伝統音楽の授業実践や教員研修に取り組んだ。しかし、いざ伝統音楽の授業をするにも、どのように授業をしたらよいかかわからないといったことや、教師自身が伝統音楽についてあまりよく知らないので、授業をするのをためらってしまうという課題があがってきた。そこで、本研究の目的は、伝統音楽教育プログラムの再考及び開発を行い、さらに我が国の伝統や文化に関する教育を充実させていくことである。そのために、本校においては開発した授業実践を、伝統文化と音楽科の教育内容とのかかわりに注目しながら再考し、よりよい授業実践を目指していく。このなかで、和楽器等を使用しない授業実践もさらに開発し、より学校教員が実践しやすい内容を提案する。また、教員研修においては、専門家による伝統音楽の講話・実践とともに、模擬授業の提案や協働での授業開発を行うなど、授業実践へとつながるような研修を開発し、地域の伝統音楽教育の充実に図る。さらに、京都府・京都市の公立学校と連携し、伝統音楽の教員研修及び実践を行う。

2. 調査研究の実施内容

(1) 具体的な実施内容 類型【 Ⅲ 】

本研究では、本校と本学の教員と協働して、伝統音楽の授業内容の再考と教員研修を行った。第一に、授業内容の再考である。これまで開発した授業プログラムを、取り扱う伝統音楽の文化的背景から捉え直し、その特性から教材性を見いだすための教材研究をもとに、プログラムの再考及び開発とその実践を行った。和楽器等がない学校でも活用できる実践とするために、祇園囃子の口唱歌を活用してお囃子づくりをする授業や、わらべうたを活用した《丸竹夷》の音楽づくりや《ほたるこい》の歌唱の実践などを充実させた。

7 月 第 5 学年「祇園囃子を演奏しよう」 第 4 学年「箏で問いと答えの音楽をつくろう」授業実践

7 月 5 日 校内研究会 研究授業第 6 学年「リズムパターンの組み合わせを意識して祇園囃子をつくろう」

7 月 12 日 第 1 回 伝統・文化教育推進委員会 研究授業第 1 学年 《こんこんちきちん》を歌おう

8 月 1 日 2 日 平成 30 年度伝統音楽指導者研修会（東京芸術大学於）

10 月 5 日 第 4 学年「四つ太鼓を演奏しよう」芸能六斎伝承者と連携した授業

10 月 第 4 学年「リズムパターンを意識して四つ太鼓を演奏しよう」授業実践

10 月 第 5 学年「《こきりこ》を演奏しよう」 第 2 学年「和太鼓の音楽をつくろう」授業実践

10 月 18 日 第 2 回 伝統・文化教育推進委員会 研究授業第 5 学年 《こきりこ》を演奏しよう

11 月 第 1 学年「《丸竹夷》を演奏しよう」授業実践

第 5 年「祇園囃子《御影》を演奏しよう」 第 3 学年「四つ太鼓をつくろう」授業実践

1 月 第 1 学年「《もの売り歌》をつくろう」 第 4 学年「桃小たんけんうたをつくろう」授業実践

1月25日 第3回 伝統・文化教育推進委員会 研究授業第3学年 口唱歌でお囃子をつくろう
2月 第5学年「《ほたるこい》を歌おう」授業実践

第二に、教員研修を実施し、伝統音楽の体験と模擬授業による実際の授業提案を行った。まず、京都市総合教育センター日比野晶子主任指導主事と連携し、京都市左京南支部音楽主任研修会で伝統音楽に関する研修を行った。本研究で開発した箏のDVDの活用についても紹介し、「おまつりの音楽」を教材とした和太鼓を使った実技研修を行った。そして、平成29年度に引き続き、伝統音楽の体験と模擬授業による実際の授業提案を行うワークショップを開催した。また、今年度は、わらべうたの研修で、ワークショップの参加者と一緒に教材研究を行い、グループで授業デザインを考えることも行い、より実践的に明日の授業につながる研修を開発した。実施日程は10月19日（金）わらべうたの音楽の授業 講師：清村百合子（京都教育大学教授）、11月9日（金）箏の音楽の授業 講師：林美恵子（箏・三絃演奏家）、12月12日（水）芸能六斎の音楽の授業 講師：中堂寺六斎会 である。各ワークショップでアンケートをとり、その研修の評価を行った。

第三に、京都府・京都市の公立学校と連携し、伝統音楽の授業や教員研修を行うことによって、伝統音楽教育の充実を図った。本校で開発してきた伝統音楽プログラムを基に、城陽市立久世小学校と京都市立池田小学校の教員と協働して、伝統音楽の授業を実践した。教材研究及び仮説生成模擬授業などを共に行い、実践校の子供たちに応じた授業デザインとなるよう検討を繰り返した。城陽市立久世小学校では、第2学年で和太鼓の音楽づくりの授業を行った。京都市立池田小学校では、第4学年で《こきりこ》の器楽の授業を行った。伝統音楽と出会う子供たちは、それらを活用して生き生きと音楽表現をしていた。

（2）成果の検証

第一に授業内容の再考である。これまで開発した授業プログラムを、取り扱う伝統音楽の文化的背景から捉え直し、その特性から教材性を見だし授業デザインを再考した。例えば、祇園囃子の授業では、鉦のリズムパターンから祇園囃子らしさに注目させ奏法を考えていくことで、その特性を生かした演奏をすることができた。また、口唱歌を活用したお囃子づくりの授業を開発することで、「和楽器がなくても、口唱歌を手掛かりに、どこの学校でもお囃子づくりの授業が可能であることを実証してくれた。」といった声が教員等から寄せられ、実践への意欲につながったと考えている。これら再考した授業プログラムを実践プログラム集にまとめ、教育実践研究発表会（2月8日）で配布した。さらに全国の国立大学附属小学校及び京都府市の公立小学校に発送することで、伝統や文化に関する授業実践の充実が期待される。教育実践研究発表会でのアンケートでも、本研究の内容が活用できるかという問いに対して、アンケート回答者全てが「活用できる」と回答している。

第二に教員研修プログラムの開発及び実施である。アンケートの「研修の内容は分かりやすいものでしたか。」という質問に対しては、ほとんどの研修参加者が分かりやすかったと回答している。アンケートには、「実践を交えながら、いろいろ学ばせていただいた。」「（箏は）初心者だったが、一つ一つ丁寧に指導してもらえた。」「（箏の）弾き手の指が見えやすいように、映像にしてもらえた。」「専門家の説明と演奏を見てからの授業だったのでよかった。」など、伝統音楽の実演と実践が一体となった研修であるので、分かりやすかったと記されていた。また、演奏者の手元を映し出したり、参観者の考えを共有したりするためICT機器を活用したことも、分かりやすさにつながったと考える。

研修に対する満足度も高かった。「自身も楽しみながら、授業への具体的イメージができ

た。」「たくさん実際に楽器を触らせてもらえて貴重な経験だった。演奏も間近で聴けてありがたかった。」「伝統音楽を授業で大いに取り入れたいと思っていたので、とても参考になった。」などの回答からは、自分自身が伝統音楽を楽しみ、その面白さを知ったからこそ、実践につなげたいという思いをもったことが分かる。伝統音楽の魅力を感じるところから授業づくりは始まる。伝統音楽を間近で鑑賞し、体験するからこそ教材としての価値を感じることができるからである。伝統音楽の授業実践の広がりと共に、これからも教員が基本的な奏法や楽器の取り扱い方を学ぶ必要性は高まっていくと考える。また、わらべうた研修では、授業の提案だけではなく、参加者と一緒に授業デザインについて考えた。それゆえ、「これまでの授業は歌って終わることが多かったが、多様な授業の在り方を学ばせてもらった。」「各グループの授業づくりがいろいろあってヒントを得られた。」といった感想が寄せられ、授業を考える手立ても得られたようだ。このように、伝統音楽の実技研修（体験）と模擬授業による授業提案を組み合わせた形態の研修は、参加された方々の意欲を高め、実践へとつながっていくということが明らかになった。今後もこのような研修を引き続き行っていくことで、広く伝統音楽の授業実践の充実を図っていきたい。

第三に、京都府・京都市の公立学校と連携し、伝統音楽の授業や教員研修を行うことによって、伝統音楽教育の充実を図った。いずれの実践においても教材研究から一緒に行うことで、教員が伝統音楽に対する理解を深めることができた。城陽市立久世小学校では、京都府小学校教育研究会音楽科研究部の研究協力校として委嘱を受け、全職員で音楽の研究を行なっている。教材研究や仮説生成模擬授業の段階から一緒に取り組み、また本校での実践も共有することで、和太鼓の授業実践が大変効果的なものとなった。そして、本授業は研究発表会でも公開され、多くの教員が参観した。「同じお祭りの音楽づくりでも、工夫次第でこんなにも授業展開が変わっていくのだと感じた。」「日本の伝統楽器である和太鼓を教材にすることで興味をもち、体全体でリズムを感じることができてよかったと思う。」という感想が寄せられた。また京都市立池田小学校でも、若年教員の研修の一つとして授業が位置づけられて公開された。いずれの協力校においても、実践を通して多くの教員が伝統音楽の授業について学ぶことができた。

3. 実施体制

本学の教員と、京都府、京都市教育委員会の指導主事及び伝統音楽の専門家による伝統・文化教育推進委員会を中心に研究をすすめてきた。

京都教育大学副学長（附属学校担当）兼附属学校部長	中 比呂志				
京都教育大学教育学部教授（音楽科）	清村 百合子				
京都教育大学教職キャリア高度化センター教授	西井 薫				
京都教育大学附属桃山小学校 校長	香川 貴志	副校長	兒玉 裕司		
主幹教諭	桑名 良幸	教諭	北村 慎朗	高橋 詩穂	越知 照子
京都教育大学附属桃山中学校 教諭	野上 華子				
京都府教育委員会学校教育課指導主事	瀧上 多佳恵				
京都市総合教育センター指導室主任指導主事	日比野 晶子				
箏・柳川三味線演奏家	林 美恵子	林 美音子			
南観音山囃子方会 祇園囃子伝承者	鈴木 昌和				
中堂寺六斎会 芸能六斎伝承者	橋本 雅文	塩見 昌也			
民俗音楽学会員	藤田 加代				

4. 今後に向けて

伝統や文化に関する教育への理解と必要性の高まりと共に、実践を試みようとする教員は増えてきている。しかし、指導する際、教員自身が、箏や和太鼓などの経験がなく、その実践をためらってしまう現状はまだある。例えば、箏の授業をしようと思っても、楽器をどのように調弦し、配置するのか、爪はどのようにはめるのかといった基本的なことが分からないという声がある。そもそもよりよい音や音楽を求めていく音楽科の授業で、教師がよい音を知り、それを再現できなければ、一体どのように音楽の授業を構築していくのであろうか。また、楽器の整備など環境面の問題もある。

本研究では、そのような課題に対応するために平成27年度に指導者のための箏のDVDを開発し、その普及に努めてきた。今年度は、実践をするにあたり事前に教材研究として活用したり、あるいは研究会の資料として活用したりという報告があった。新学習指導要領において、第3学年及び第4学年から器楽指導で取り上げる旋律楽器として和楽器が例示されたことにより、このDVDは一層活用されていくであろう。一方で、DVD等の視聴だけではなく、実際に伝統音楽に触れ、自分で芸術を体験することが必要である。教員自身がその楽しさやおもしろさを知ること。そしてその具体的な授業デザインを学ぶことが、伝統や文化に関する教育の授業実践の充実へとつながるのである。

さて、本校では、伝統音楽を教材とした授業実践を積み重ねてきた。実践を積み重ねていくことで系統性や、授業の指導内容の妥当性などがみえてきた。伝統や文化に関する教育は、すでに特別授業ではない。実践を積み重ねていくことで、さらなる教材研究が進み、よりよい授業になっていく。例えば本校では、祇園囃子の教材研究に取り組み、楽器の音色や拍、鉦や太鼓のリズムパターン、旋律や旋律とリズムの重なり、掛け声などいろいろな指導内容が授業の軸となっていくことが明らかになってきた。そして、これらの指導内容には前後関係があり、系統性が見えてきた(表1)。例えば祇園囃子のリズムパターンを活用してお囃子づくりを実践するためには、以下の指導が必要である。

表1 指導内容の関わり

リズムパターンの組み合わせによるお囃子づくり			
旋律とリズムの重なり		楽器の音色の重なり	
掛け声	能管の旋律		能管の音色
		太鼓のリズムパターン	太鼓の音色
		鉦のリズムパターン	鉦の音色
		拍	

京都府市で協働しながら実践をしていく中でも、こういった系統性を整理していくことの必要性を強く感じた。教員が、指導する教材の前後関係を知って指導することは、いずれの教科においても当たり前のことである。しかしながら、伝統音楽に関してはこれまでの実践の少なさから、まだまだその段階に至っていない現状がある。今後も伝統や文化に関する教育の質的な充実を目指して、伝統音楽の教材性や系統性を整理し、普及していく必要があると考える。